

NEWSLETTER

No. 16

岐阜大学国際交流室 1992年11月15日

国際交流＝英会話？

日本語教育の立場から見た国際交流

ここ数年の間に「国際交流」と言う言葉がよく聞かれるようになって来ました。辞書で内容を調べることができないその言葉の本当の意味について、岐阜大学国際交流室で直接留学生に接している5人の日本語教師の方々〔及川由利氏、加藤由紀子氏、河地忍氏、後藤規子氏、中島智巳氏〕に、内側からの意見を座談会形式で聞きました。司会は国際交流室日本語教育担当の廣田則夫先生にお願いしました。

司会者：まず、岐阜大学の国際交流室において、普段「日本語」で留学生と接している私達から見た国際交流について考えてみたいと思います。

A：これはよく言われることなんですけど、私が「日本語教師をしています。」というと、「じゃあ英語がお出来になるんですね。」とか「国際交流していらっしやるんですね。」という返事が返ってくるんですよ。これは大きな誤解だと思いますね。

B：そういえば私もこんなことを聞きました。「いいわね、外人とつきあえて、英会話もできて、そのうえ外国の料理も教えてもらえるなんて。日本語教師っていい職業ね、私もやろうかしら…」って。

一同：?!?!?!

C：私も、先日あるパーティでこんな光景を見かけたんですが、外国人が一生懸命日本語で話しているのにその相手側の日本人が英語で話しているんですよ。もうほとんど喜劇でしたね。

D：「外国人は日本語ができない」という先入観が強すぎるんでしょうか。

司会者：そうですね。確かに、5年前や10年前とは状況が変わって来ていますから、もうそろそろその先入観は取り払われるべきだと思うんですが。

A：でも、先日ある生徒が「あなたは変なガイジンだ。」と言われてショックを受けていたの

で、事の次第を聞いたんですよ。そうしたら、クラスの中で習った日本語を実際の生活の中で使ったら、「知りすぎている」という理由で変なガイジン呼ばわりされたということなんです。私たちは日本語という言語を教えると同時に日本の文化や習慣も一緒に組み込んでクラスをすすめていますよね。それはもちろん彼らの日本での生活を助けるだけでなく、文化や生活習慣を含んだ日本語を理解してほしいからなんです。それを素直に受け入れた学生に対して変なガイジンといわれたら私たちもショックですよ。

B: そうですね。やはり人間と人間の関係ですから留学生の心情的な面をサポートすることも含まれていますが、私たちがここでしているのは日本語教育であって、国際交流を促進しているのではないわけですよ。いかに短期間に効果的に日本語能力を身につけさせるかということが問題であって、そういう意味では国際交流室の日本語教育の在り方というものが明確になってきたと思うんです。

E: ただ、国際交流室内だけで明確にするのではなくて、この先の日本語教育の方針も含めて岐阜大学での日本語教育の現状を、大学の内部の人にも外部の人にも分かってもらうことも必要なんじゃないですか。

一同: (大きくうなづく)

司会者: 従来の『日本語教育＝国際交流』という形、すなわち日本人が留学生と会っていること自体が日本語教育になり、留学生が困っているところを個人的にいろいろ面倒を見てあげるのも日本語教育の一環とすればそれはそれでいいんですが、留学生数が激増しているためにそういうふうにはできなくなってきているんですね。少なくともこれからは無理でしょう。ですから認識を新たにする必要があると思いますよ。

D: でも実際問題として「日本人ですから日本語を教えます。」と考えている人がまだかなりいるんじゃないでしょうか。

B: そうですね。现阶段で日本語教師でない人から見れば、日本語教育という言葉がとても華やかに聞こえるみたいですから。新聞やマスコミでも日本語教育は国際交流の欄に載るくらいですからね。

A: ただ一つ怖いのは「日本語を教えますよ」と言いながら、実は自分が英語（あるいは、外国語）を習いたいのために、何らかの見返りを期待して外国人に近づいて行く人が思った以上に多いということなんですよね。「私は（例えば）英語をマスターしたい、そして相手は日本語を習いたい、じゃあ交換しましょ」という言わば商談が成立してしまうんですよ。確かに、中には純粋な気持ちで接している人もいるんでしょうが…

C: やはり日本語を一言語として意識する前に母国語だからと安易に思い込んでしまうと、後でとんでもないことになってしまいますよね。

D: 外国人と（例えば）英語で話したい日本人と、外国人と日本語で話したい日本人とでは、

圧倒的に前者の方が多いのではないのでしょうか。

B : それならいっそのこと外国へ留学すればもっと効率が上がるのに。

司会者 : 外国へ留学するとなるとまた違った問題になりますが、逆に日本へ留学している人についてはどうでしょうか。彼らは日本語を習得したくて留学したわけではないはずですが。

C : そうですね、でも留学生のほとんどは日本に来たときは日本語はゼロに近いですね。もちろん国で数カ月から半年、あるいは何年間か日本語を勉強してから日本へくる人も中にはいますが、そういう人は最近珍しくなって来ましたね。

E : その点がおかしいなと思うんです。日本人が海外留学をする場合、多少なりともその国の言語を勉強してから行きますよね。そして専門のクラスにでるわけですが、外国からの留学生を受け入れたときは、「あなたはどの言語だったら通じるの？」とまず相手の使用可能な言語を聞くんですよ。仮に語学留学の例を取ってみても、その語学学校で目標とする言語以外は使わないはずなんですけどね。

D : 日本人の世話好きということがある意味で裏目にてているということでしょうか。頼まれる前からいろいろしてあげてしまうというような。

B : 確かに、容姿が日本人とそれほど変わらない場合は、最初の一言から日本語で始まるようですが、一見して外国人とわかる人に対してはほとんどの人が「日本語は通じないだろう。」と思うみたいです。ですから日本的な顔をしている人がバスに乗ったときに「日本語が話せないなんて！」という態度をとられたり、逆に一目で外国人だと分かるような人には聞かれてもいなのに英語で 'May I help you?' と言い寄って行ったり…なんだか変ですよね。

A : 一つには「英語が国際語だ。」という考え方自体にも問題があるんですけどね、「英語だったらどこでも通じるだろう。」という考え方が国内外を問わず共通意識になっているのがよくないのかも知れませんね。

E : でもそれはある意味では留学生たちにとって、とてもかわいそうなことですよ。英語で用が足せるとなってしまうと英語以外には伝達手段を取れなくなってしまいますから。

D : そうなると相手の立場を考えない国際交流はそういう人達にとって、邪魔にこそなっても絶対プラスには働かないことになりませんか。

司会者 : そうなりますね。

D : 日本語教育の現場にいるものとして、それでは非常に困るんです。

一同 : 本当に！

C : 何を国際交流とするかはそれぞれだと思いますよ。でも相手の身になって考えずにこちらの親切を押し付けるのが国際交流じゃないということだけは明白ですよ。この場合親切はもう親切じゃなくなっているんですけどね。

B: あと、やっぱり受け入れる側としても毅然とした態度をとりたいですね。例えば、旅行者は別ですが、少なくともこれから日本に留学しようと言うなら、ひらがなやカタカナは読めるくらいにしてから来てほしいとか、また私たちが相手をお客さん扱いしないとか、思い当たるところは結構ありますよ。

A: ただ、ここでわざわざこんなことを言わなくても、それを当然のこととして交流を実行している人も中にはいるんじゃないでしょうか。残念なことにそういう人達に限って決して表には出ないでしょ。「当たり前のことをしているだけですから。」とかおっしゃって。本当はそういう人達をこそお手本にしなければならないんじゃないでしょうかね。ほとんどの場合はあまりにも表面的なことに踊らされてるような気がして…

C: そうですね。国際交流、国際交流といって表面的な国際化…

D: そうそう。よくありますよね、国際なんとかという名称のイベントが。

C: そう、そればかりが目につく中で、ちょっと腰を落ち着けて考える必要があるでしょうね。ところで、この《国際交流室》という名前、変えられませんか。かけこみ寺じゃないんですから。

E: 《日本語センター》なんてどうですか。活動内容がはっきりしているんじゃないですか。…

…と座談会は延々と続いたわけですが、とりあえずここで一区切させていただきます。

国際交流室での現在の日本語教育体制ができてから既に4年を経過しました。もちろん岐阜大学の留学生全員が国際交流室の日本語の授業を受けているわけではありません。でも受講生のはほぼ全員が、日本語が全く分からないという状況から始めて半年後にはとりあえずのコミュニケーションが取れるまでに日本語を習得します。これは日本語教師の力だけでなく、大学内外の多くの方々の協力を依るところも大きいと思います。今後もさらに広く皆さんの御理解をいただいて日本語教育を充実させて行きたいと思います。

アメリカの協定大学を訪ねて

岐阜駅へ集合した学生たちの顔を見ていると、こちらも胸が高鳴って来て、何か修学旅行の気分であった。安藤学生課長の出席点呼や注意事項を述べる大きな声がそれに輪をかけるようであった。団体での旅行だから何か起きるだろうと思っていたら、案の定、駅のアナウンスがあって岐阜大学の名を呼んでいるという。案内所へ駆けつけると1人の女子学生が体調をこわしているから、岐阜駅へ行かずに直接名古屋駅へ向かうという。そんなことならと思いホッとす。無事出発。

成田では「戦争」に近かった。人と肩をぶつけ合わないと思けないという南ウイングのチケット

カウンターで、生協の窓口がわからない。我々の生協による団体チケットなのである。アメリカンエアラインの方は何とかあった。ユナイテッドで行くという4人の学生の分が何処の窓口で貰えるのかわからない。暫く順番待ちでユナイテッドのチケットカウンターへ行って見たら、生協の分は扱っていないという。又、汗を流して（この間、4人の学生はおしゃべり、もっとも私が待っている、と教師風を吹かせた為だが）走りまわる。しかし、最後は4人の学生の手により無事そのカウンターを発見したのだが、この4人はご難続きで、実はサンフランシスコで予定の飛行機に乗れなかったのである。成田の南ウイングでの事がそれを暗示していたようであった。

合計20時間近い缶詰状態で、ようやく目的地に着く。一番先にカバンを手にして出迎えゲートへ出て行った学長が走るように我々のところへ戻ってきて「いた、いた」と叫ぶ。何かと思いきや、実はノーザンケンタッキー大学のバスを仕立ててのお出迎えであった。国際交流プログラム室長のKlembara教授他5人の人々が高々とWELCOME GIFU UNIVERSITYとプラカードを掲げていたのである。心の暖かさを感じるにはこの事かと思う。笑い声、挨拶、スピーカーの騒音に到着の安堵感が湧きおこる。しかし、再び問題が発生。Klembara先生が、最新のメッセージだといって、△△他3名明朝8時5分に到着するという。そんな馬鹿なと思ひ人数を数えると、4人ならず6人も居ない。安藤課長がユナイテッドのバゲージ・クレイムへ走る。2人居た。うち1人の学生の荷物が未到着だという。「兼」通訳の小生が駆けつけると2人は係官と何やらしゃべっている。どうやら手まねというより、確かに英語でやっているらしい。これだ、と思った。小生は差し控えて見物することとした。英語の実際である。「我に七難八苦を与え賜え！」とその昔、尼子藩の家老山中鹿之助が云ったとか云わないとか。バッグ未到着の彼には少々気の毒だが、英語の勉強には「七難」も「八難」もお金を出してでも買え、と云いたいぐらいだ。

翌朝、クラスルームへ顔を出してみると、荷物は未到着であったが、遅れた4人の女子学生は一同にまぎれて疲れた顔もしていない。成田のユナイテッドの4人であった。Ms.Dorothy Soré と Ms.Barbara Toupadakis と名乗る2人が先生である。ゆっくりした発音にはなまりもなく大変聞き易い。学生たちは一様に緊張した面もちである。朝から大変な授業計画である。8:30-8:45 General questions and answers, 8:45-9:20 Grammar, 9:20-9:30 Break, 9:30-9:45 Pronunciation, 9:45-10:20 Reading, 10:20-10:30 Break, 10:30-11:30 Vocabulary and Conversation(Writing)。しかし、午後は生きた英語を、ということでスーパーへ出かけたり、美術館へ行ったり、終わり頃には大リーグシンシナティーン・レッズの野球見物にも行くという。かゆい所に手の届く、というサービスぶりである。

加藤学長、堀内国際交流室長、安藤課長そして私はサイエンス・アンド・テクノロジーの Thomas Harden 博士と Ralph O'Brien 博士の案内で学部を見学して歩く。つい先日岐阜大学から戻ったばかりという David Hunt が大変嬉しそうにはしゃぎ廻って案内の Harden 先生の説明に駄洒落を加える。色々の機種を取り揃えたコンピューター実習室が私の注意を引きつけたが、学長の説明

によると岐阜大学を少し上回る程度だという。常のことだが専門が異なると質問が出来ない。まさに英語をしゃべれないのである。岐阜大学でも工学部の先生たちがよく学生の英語の実力不足を嘆かれるが、それも中身と関わりないであろうか。専門の授業について行けないからそうなる。

学生との昼食の機会が与えられ、彼らを激励する。午後再びブレイクの時彼らと逢う。その時ケンタッキー・ポストというケンタッキーでは大きな発行部数を持つ新聞の記者が来た。学長にインタビューする、ついで私の方へも来た。しかし、「国際交流とは何か」「相手を理解するとはどういうことだ」「理解するだけで国際交流が出来るのか」「英語を勉強することが国際交流とどうつながるのか」など、大変ベーシックな事を聞いて来る。こわそうな顔をしているので早く逃れたいと願う。しかし、今度は学生にもインタビューしたいという。仕方なく学生を連れ出す。しかし、意外にも、照れながらも巧みに答を出す彼・彼女らを見て、唾然としたのは私の方である。なんだやれるじゃないか。彼らの中から、一人か二人本当の意味での国際交流を押し進めてくれる人材が出るのは大いに期待できそうである。(記者氏の報告は確かに翌日のケンタッキー・ポストの第一面下段に大きく載った。)

事務総長補佐の Sandy Easton, 国際交流プログラム室長の Michael Klembara, 同補佐の D. Seary, 留学生担当の Eileen Thornton の諸氏とその日の午後交流協定をめぐる話し合いに入る。約3時間ほどであったが、大変有益な話が出来たように思う。大学紹介, カタログ, 研究者一覧等の諸資料の交換はもちろん, 協定書の不備を修正する話し合い, そして研究者交流の具体化を探る話となった。特に研究者交流では互いに宿舍を提供し合って, 研究者を迎え入れ, 講義, 講演, 共同研究, 共同実験等を実際に行える受け皿の開発をすることで合意がとれた。Jorns 副学長は事の外この研究者交流に熱心で、「1ヶ月間といわず1年間でも結構だからおいでなさい」という。有り難いことである。我が方の態勢作りも急ぐ必要がある。

夕方, サスペンション・ブリッジといって, ニューヨークのイースト・リバーに懸かっているブルックリン橋と同じ型(設計者同じ)の橋のイルミネーションを見降ろしながら, Jorns 副学長主催の夕食会に臨んだ。加藤学長はジャンボライヤーを注文し, その辛さに泣いていた。我々の残り3名も夫々料理を注文したのはよいが, 量の多さと, 甘さにこれ又泣かされる。安藤課長はアメリカが始めてというので張り切っていたが, 食事には困った様子であった。言葉も大変であったから, 少々どころか, こちらでも大いに腹ふくる思いであったと想像される。

7月22日(火曜日)は, 再び午前中 Klembara 教授と会談したあと, 現地日本企業の代表者を受けて昼食会。いつも思う事だが, アメリカにいる日本人の方達はおしなべて, 恐い顔をされる。日本にいるアメリカ人にも私はそんな印象を持つ。日本に住む日本人と, アメリカに住むアメリカ人とはゆっくりした顔である。

夕方は Klembara ご夫妻の歓迎夕食会であった。妻を大切に作る夫の姿を見る。夫人のはひどいテキサスなまりの英語なので, その点を尋ねてみると「イエス, バット, 私の耳には妻のこのなま

りはミュージックなのだ」という。そのような事を私も一度云ってみたいものである。

ノーザンケンタッキー大学を離れて、サンディエゴ州立大学へ向かう。そこは予算を大きく割られて、昨年は非常勤講師を300名、今年は常勤教員を145名削減するという。そのために、9つのデパートメントが閉鎖されることになっている。ノーザンケンタッキーの場合は、経費の半分を企業からの献金でまかなっていて、こちらは順調に献金が集まるという。卒業生が多く地元へ就職する事が主な理由だということのようであった。サンディエゴは全額、おそらく州政府からと学生の授業料等の収入でまかなうものらしいが、どうも問題は税収入が落ちたことによるものであるようだ。

サンディエゴ州立大学の要人が留守なのを承知で訪れたものであるが、Dr. Cottrell が応待してくれてほっとする。昨年から岐阜大学へ来ていた留学生について、単位の振り替えがうまく運ばず堀内室長を悩ませていた問題を話し合うことができた。ほっとする。

夕方、我々に加えて、現地におられた若井工学部助教授と9月から留学生となる教育学部の沼波千恵さんと6人で夕やけに染まるサンディエゴの海を眺めながら味わったことの余りないシーフードを食べる。味はさ程でもなかったが、仕事が終わったという安堵感と解放感から、楽しい夕食となった。

やはり来て見て、人に逢って話してみてもよかったというのが、堀内室長と私の実感である。

1992年7月アメリカの協定大学を廻ってみて

—AAの機上にて—

国際交流委員会委員長 菅原光穂

『日本の古都と飛騨路を歩んで』

国際交流室室員 松浦晃次

つゆも明けて：—— 奈良と京都をこんな時期に巡るなんて狂気の沙汰だよと呟いていた。大仏殿も天龍寺もそうだった。それにもまして二条城の広い本丸庭園は陽光を遮る場所がない。それでもルンドの留学生たちは、体温に近い気温の中で陽気に跳ね回っていた。松の木の薄い木陰の下を横切るとき、これが“日かげ”でこれが“日なた”だと日本語の勉強を続けてはいたが、「どういう字を書きますか」と聞かれてもボーッとして答えられない。同行の森田さんに「雨の京都のほうが、まだエクスカージョンに向いていますね」と同意を求めた。

やまとなて：—— 「仏像の勉強はしてきたでしょうね」と私は問いかけた。「これから行く興福寺には国宝ばかりですよ」と言って昨年までのことを思いだした。留学生たちは、次々と仏像の洪水に出会うとうんざりしてしまうようで、別の救いが必要になってくる。私は、何とか親しんでも

らえないかと鑑賞の手引きを与えておいた。「日本の典型的な如来像である釈迦・薬師・阿弥陀の区別はその指の組み合わせの形で分かる」などと印相のことを聞かせるよりも、美しい菩薩像の一体に出会うことの方が日本の文化の一つに触れることになるのではないかと考えたりした。民衆の信仰と観音菩薩との結びつきについて私見を披露しても、現実にはどうも受けが良くない。多面多臂の姿形からは、私たちの持つ“古寺巡礼”的な甘美さを今すぐ求めることは出来ないのではないか。ところで、日本の寺院建築の中ではパゴダに人気がある。薬師寺の三重の塔は六重ではないかと首を傾げる。色鮮やかな西塔の下の日陰に皆で腰を降ろし、人影の絶えた真夏の東塔を視界の中に独占した。「こちら側の塔も千年の後に見に来てごらん下さい。きっと国宝になっているから」と言って立ち上がった。

スコッル：—— 今年の六月に“起し太鼓の里”が古川にオープンした。ここでは勇壮な神事を大型の立体映像で再現してくれる。留学生たちは古川祭りの迫りに堪能してから、あと白壁に沿う流れの中の鯉の群にはしゃいでいる。我々は火曜日に町を訪れたので、残念ながらそれ以外の資料館はすべて休みだった。次には、高山の宿での初めての夕食である。食事の折、西欧では飲物を主食と同時に頂くのが習慣である。したがって和食の席において「乾杯！」とやった直後から、ビールでも日本酒でも彼等は茶碗に盛った御飯と交互に口に運ぶことになる。日本の大人には、これがどうにも気に入らない。日本の風習によると、食前と食中とでは飲物が異なることから教えなければならない。この度は孤軍奮闘で細かい指示を与えたけれど、その後は多少なりとも食の日本文化を身に付けてくれたようだ。けれど、ある日の昼食時に私から離れた遠くの席で西欧流に生ビールを飲んでいる一人を目にしてしまった。

ビールを・私は・飲みたい：—— 高山の市街をレンタサイクルで効率的に回ることにした。梅雨の末期ではあったが夕立の来るまでの間は日射しがかなり強い。午後になって“飛騨の里”までの坂道を自転車で登ったのは十分な運動だった。一緒に留学生の面倒を見て頂いている瀬戸崎先生に「自転車でも大丈夫ですか」と念を押してあった事の意味が理解して頂けたようである。下呂の宿では外出する元気もなく、一同は食後一部屋に集まった。「日本語の発音は易しいと思いませんか」と私から口火を切った。「一般に、外国人が日本語を学習するということは非常に難しいものだ日本人は思い込んでいるようです。普通の会話の範囲ではむしろ易しいと考えると私は言い、「抑揚の与え方と母音の延ばし方に外国人に特有の発声が見られます」と単語の例を示して発声させた。それは世界と正解、景色と形式であり、また鳥と撮りと通りであった。次に逆に日本人の外国語の会話力に関して「日本語の語順では《私は・ビールを・飲みたい》が文法上正しい」ということから語り始めた。「この3語の接続は助詞をロシア語の語尾変化のように考えれば、組合せて6通りの形式が得られます。そして、日本語の会話ではこれが全て正解なんです。そのため、我々は最初に頭に浮かんだ単語をすぐ文章の先頭に置くことができます。実はこれが言語構造上から来る西欧語を話す上での障害となっています」と意見を述べた。すると「先生、あなたはいつも

《ビールを》から始めるのですか」と逆襲された。「いやいや《飲みたいなーっ》からですよ」と私は答えた。

『国際交流室員一年生』

農学部生物資源利用学科 鈴木文昭

「フミア〜キ〜」耳慣れた声が出たと思ったら、クラウドが私を見つけて駆け寄ってきた。4年ぶりの再会である。ここはリヨン（フランス）の学会会場。私達は1年余りをハイデルベルク大学（ドイツ）で一緒に研究した仲間である。私は帰国し、彼はボストン（アメリカ）へ戻っている。家族のことや研究環境・進展など話し合い、又近い内どこかで会おうなどといって別れた。彼に家族の写真を見せられた時、私は持って来なかったことに気付いて、深く反省させられた。昨年（1991年）の秋にあった小さな出来事です。

私はこの春から国際交流室の室員（会計担当）として学内の国際交流活動に参加しております。これは、ドイツ滞在中、ハイデルベルク大学、受け入れ教官そしてフンボルト財団に多くのお世話になったことへのささやかな感謝の気持ちと思い、やらせていただいています。『国際交流室』、それは大陸での国境周辺のようなものだと私は感じています。複数の言語の中で生じる独特の緊張感、それはまるで文化と文化のぶつかる音が聞こえてくる場所のようです。国際交流とは、異文化どおしが混り合うものだと思いますが、そこには暫定的ではあるが、一定のルール又は法則があるようです。もちろんその混り合いには、多くの組み合わせや種類があるものと思われます。私は、交流室が関係するその「混り合い」で双方がケガをせずうまく交流できるよう会計担当としてお手伝いすることが最も重要なことだと実感しています。又同時に、室員一年生として、「私達の岐阜大学における国際交流室とは何か？」を学ぶことにこの1年間をエンジョイしたいとも思っています。

『ニューズレターと広報活動』

広報担当 丸山清史

ニューズレターは岐阜大学国際交流室の公報です。年3回（2または4月、7月、9月、各2,500部）発行し、学内、文部省はもとより、ホームステイファミリーや御寄付いただいた学外諸団体にも送付し、交流室の活動に理解を深めていただくための一助になっています。前後期の日本語授業時間割、サマースクールの計画、室員名簿、諸行事などのお知らせに加えて折々に良い企画を取り上げ、公報とはいえ堅苦しくなく魅力的な内容にしたいと考えています。これは編集部の腕の見せどころですが、皆様からも良いアイデアを是非拝借したいので交流室まで御意見・御感想をお寄せ下さい。編集実務で最も苦勞するのが原稿集めです。あてにしていた原稿の回収が遅れ、その結

果定期発行がままならず、公報としての効果が薄れてしまいます。また留学生に投稿を依頼する場合には、留学生と接する機会の多い日本語の先生方に頼らざるを得ません。実のところ、中島智巳先生には編集全般にわたり、絶大なる御協力を賜っています。しかし、いつまでも中島先生におんぶにだっこというわけにもいきません。留学生問題について社会の関心は高く、ニューズレターの発行以外にも柔軟で多様な広報活動を展開する必要があると思います。将来的には室員が中心になって日本語の先生、事務官、留学生、学生を巻き込んだグループでの広報活動が組織できれば良いなあと考えています。

1992年度 後期日本語クラス時間割表 (平成4年10月12日～平成5年2月19日)

	月	火	水	木	金
9:00	1 B I - 1 加藤 A II - ①河地	B I - 3 及川 A II - ③後藤	B I - 5 中島	B I - 6 河地	B I - 8 中島 A II - ⑤加藤
10:30					C I - 2 後藤
10:40	2 B I - 2 及川 A II - ②加藤	B I - 4 後藤		B I - 7 中島 A II - ④河地	B I - 9 加藤 A II - ⑥後藤
12:10					C II - 1 河地 C I - 1 及川
13:20	3 D II - 1 中島* (13:00～14:30)			D II - 2 後藤* (13:00～14:30)	C II - 2 加藤
14:50					
15:00	4 D I - 1 及川* (14:40～16:10)			D I - 2 及川* (14:40～16:10)	
16:30					

* 医学部クラス

後期授業：10月12日(月)～2月19日(金)
冬休み：12月19日(土)～1月10日(日)

◎編集後記◎

日一日と雲が高くなり、景色も秋らしくなってきましたが、皆様はいかがお過ごしでしょうか。さて、お待たせしました！ No.16 をお届けします。今回は内容がちょっと辛口仕上げになっていますが、一つのきっかけになれば幸いです。“…隣は何をする人ゾ！” TOM

発行 岐阜大学国際交流室
NEWSLETTER 係
〒501-11 岐阜市柳戸1-1
☎ (0582) 30-1111
内線2380/2381
FAX 0582-30-1108